

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02033

研究課題名(和文) 古代中国における呪術系医療文化の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study of the black art system medical care culture in ancient China.

研究代表者

有馬 卓也 (Arima, Takuya)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：10232068

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は古代中国の呪術系医療を前漢中期に淮南王劉安によって編纂された『淮南萬畢術』を手掛かりとして行うものである。

27年度。継続中の『淮南萬畢術』訳注を完成させ、本書の全体を概観した論文を発表した。28年度。それに基づいて臺灣の政治大学で開催された国際学会で口頭発表を行った。さらに『淮南萬畢術』の拾遺作成作業に着手した。29年度。九州中国学会において本研究のまとめとなる発表を行い、それに修正を加えた論文を査読付雑誌『東方宗教』に掲載した。また『淮南萬畢術』の拾遺作業も継続した。

以上の成果により、本研究が当初設定していた成果は十分に得られた。また次の課題も明瞭な形で示すことができた。

研究成果の概要(英文)：This study performs "淮南萬畢術" where ancient Chinese black art system medical care was edited at the previous Han middle by 淮南王劉安 as a clue.

At first completed translation with notes of "淮南萬畢術" continuing in the first year and announced the "淮南萬畢術" "study introduction" which caught the perspective of this book more. 28. I performed a presentation in an international congress held based on it at a political university of 臺灣. Furthermore, I started work in waiting making work of "淮南萬畢術". 29. I performed presentation of the results of the study to become the summary of this study in Kyushu Sinological Society and placed the article that modified it in the review magazine "east religion" belonging to.

In addition, I announced the work in waiting of "淮南萬畢術". The result that this study set by the above-mentioned result at first was provided enough. In addition, I was able to show the next problem in clear form.

研究分野：中国思想史

キーワード：淮南萬畢術 呪術 医学 医心方

1. 研究開始当初の背景

報告者は『淮南子』を中心とした漢代道家思想の研究をこれまで行ってきた。その成果が『淮南子の政治思想』(汲古書院、1998)である。その後、「淮南王国の八十年」(中国研究集刊 25、1999)において、『淮南子』の背景となった淮南王国の歴史的・文化的特質に関する試論を発表し、さらに「劉安登仙伝説の成立と伝播」(中国研究集刊 46、2008)において、当該地域における神仙思想の一端を明らかにし、当時の民間レベルにおける文化の諸相(現代的に言えば迷信・俗説の類)に言及した。

本研究はその民間レベルにおける文化的背景を、淮南王劉安が編纂した著作の一つとされる『淮南萬畢術』を解析することによって、さらに明らかにしようとするものである。これまで本書に対する研究は、専論として楠山春樹氏の「淮南中篇と淮南萬畢」(秋月観映『道教と宗教文化』(平河出版社、1987)が、また『淮南子』に付随する形で、胡適『淮南王書』(遠流出版公司『胡適作品集 22』所収、1986)・金谷治『老莊的世界 淮南子の思想』(平楽寺書店、1959)などが存する程度で、十分な研究が為されてきたとは言い難い。

報告者は既に平成 24 年度から『淮南萬畢術』の訳注を『東洋古典学研究』に連載中であつた。

1. 東洋古典学研究 34 (2012) 訳注(1)
序文・1 条～4 条
2. 東洋古典学研究 35 (2013) 訳注(2)
5 条～17 条
3. 東洋古典学研究 36 (2013) 訳注(3)
18 条～34 条
4. 東洋古典学研究 37 (2014) 訳注(4)
35 条～53 条
5. 東洋古典学研究 38 (2014) 訳注(5)
54 条～70 条

また平成 25 年 3 月に慶應大学で開催され

た出土資料学会において研究発表も行って
おり、時間枠内の質問はもとより、時間枠外
においても多くの質問・意見がよせられ、各
分野に裨益するものであることが確認でき
た。さらに平成 26 年 12 月には京都大学人文
科学研究所の術数学研究会(代表武田時昌)
において発表を行った。

2. 研究の目的

中国古代における民間レベルの文化は記
録されたものがほとんどなく、なかなか解明
されてこなかった。しかし、近年の出土資料
(医療系及び墓券系)により、医学分野や冥
界観などの分野において次第にその詳細が
明らかにされつつある。本研究はこれまで研
究対象とされなかった『淮南萬畢術』を解析
し、さらに本書を手掛かりに、古代における
民間レベルの文化の中から特に呪術系医療
に関する項目を解明し、同時に本書を多く引
用する『医心方』巻 26 に見られる豊富な呪
術系医学をも解析しようとするものである。

3. 研究の方法

本研究においてはまず『淮南萬畢術』の精
査が中心となる。『淮南萬畢術』に前後する
各伝世文献及び出土資料と合わせ考えなが
ら、各項目の新旧を考証する。

『淮南萬畢術』の集本として最も優れてい
る『観古堂所著書』所収の葉徳輝本(全 116
条)を底本として使用する。葉徳輝本は収集
量が最も多いだけでなく、詳細な注釈がそえ
られており、テキストとしての質は高い。

その上で、短言からなる各条項のさまざま
な解釈の可能性を俎上にあげ、古代的視点に
基づく真正理解に迫ると同時に、『淮南萬畢
術』の志向が後世に及ぼした影響についても
考える。

葉徳輝本を底本としつつ、他の集本にも目
配りしながら訳注製作作業を継続する。典拠
となった原書のチェックはもちろんのこと、

本文と注の整合性などにも注意を払う。

と同時に、この時点で『淮南萬畢術』のテキストの性質を概観する論文を発表する。さらに、訳注製作時に気づいた葉徳輝による見落とし、及び類似する内容を持つ文章の収集作業に入る。

また、この段階で一度学会での中間報告を行い、他の研究者の意見を乞う。

そして、『淮南萬畢術』において得られた医学・薬学・博物学・神仙思想・呪術・禁忌・占い・風習・伝承等々各方面の情報を整理し、それらが伝世文献に見られる諸思想においてどのような役割を果たしているかを考え、本書が持つ意義・役割を明らかにする。特に呪術系医学関連においては、「鳥」や「鬼」をキーワードとして『淮南萬畢術』や出土文献・『医心方』などを総合的に分析する。また『医心方』が引用する他の古佚書（拾遺作業によって注目される『如意方』『葛氏方』『枕中方』『靈奇方』『陶潜方』などの文献）にも考証の枠を広げる。

そして、その成果を学会で発表し、それに加筆・修正したものを査読付雑誌に投稿し、それをもって本研究のひとまずのまとめとする。

4. 研究成果

次の5. 主な発表論文等に記すように、本研究は当初の予定通り、論文8本（うち査読付論文1本）、学会発表2回（うち国際学会1回）を成果として残すことができた。まず、当面の課題であった『淮南萬畢術』の訳注を初年度に終了させ、同時に本書の位置づけを行った『『淮南萬畢術』研究序説』を発表することができた。

具体的には、これまでさほど注目されてこなかった漢代を中心とした中国古代の民間レベルの文化を、呪術系医療という方面から多少なりとも明らかにすることができた。特に小児の癩癩の症状を表す「驚」について考

え、当時における癩癩の病因の究明、及び治療に対し、体系的に把握することができた。このことはテキストの読み直しの可能性の提示にも至るものである。

本研究の成果の特色としては、『淮南萬畢術』を同時期の『五十二病方』、やや後の時期の資料を多く収める『醫心方』などと有機的に捉え得た所にある。これは今回取り上げた小児科の癩癩の「驚」にとどまらず、あらゆる病気についても応用できる。今後さらなる展開が期待できる。

以下、期間中に記した各論文について簡単に記しておく。

まず訳注の続きは以下の通り。

6. 東洋古典学研究 39 (2015) 訳注 (6)
71条~95条

7. 東洋古典学研究 40 (2015) 訳注 (7)
95条~116条・跋文

また拾遺は以下の通り。

1. 東洋古典学研究 41 (2016) 拾遺 (1)
博物志・神異経・斉民要術・開元占経・典術・異術

2. 東洋古典学研究 42 (2016) 拾遺 (2)
如意方 (上)

3. 東洋古典学研究 43 (2017) 拾遺 (3)
如意方 (下)

4. 東洋古典学研究 44 (2017) 拾遺 (4)
靈奇方・得富貴方

また、学術論文は以下の通り。

1. 『淮南萬畢術』研究序説
東洋古典学研究 40 (2015)

目次

はじめに

第一章 テキストの諸問題

1 テキストに関して

2 『淮南萬畢術』を引用する諸書

3 集本に関して

4 内容の概観

5 解釈の多様性

第二章 『淮南萬畢術』の特質

- 1 医学思想
- 2 化の思想
- 3 生活の知恵
- 4 心を操作する呪術

おわりに

2. 呪術系予防医療の一端

『淮南萬畢術』解析試論

東方宗教 130

目次

はじめに

- 一 「驚」の病状と病因
- 二 「驚」の治療
- 三 「驚」の予防

おわりに

本研究で様々な呪術系医療行為を調査する中で、古代中国における「心」という文字が持つ意味の広がりを見直し、再認識した。そもそも古代中国人にとって「心」とはどのようなものであったか。この問題は「心を操作する呪術」を手掛かりとして、古代中国人の「心」に対する基本認識を明らかにすることで、その一端を解明できると考える。「心を操作する呪術」とは、現在でこそ、医療行為とは一線を画するものとされているが、当時においては、同一ベクトルのものと考えられており、中国古代の医学書の多くが「心を操作する呪術」を医療行為として収録している。「心を操作する」という場合、「心を操作して旧の感情にもどす」「心を操作して新たな感情を誘発する」等が考えられ、事例も多様であるが、古代においてはさらに「心を操作している者を追い払う」という考え方がこれに加わる。即ち心が鬼神や精霊、狐などに支配されているので、それを追い出す・退治するという考え方である。本研究は『淮南萬畢術』や『醫心方』、さらに近年の出土資料が手がかりとなって、当時の呪術系医療における「心」の位置づけを明らかにしてくれるものと確信している。

我々は無批判的に古典中の「心」という文字を我々の感覚で解釈してきたのではないのか。古代人の言う「心」は、もっと大きな意味の広がりを持っていたのではないのか。これが次の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

『淮南萬畢術』拾遺(4)(有馬卓也・東洋古典学研究 44、2017.10、51-68、査読なし)

呪術系予防医療の一端 『淮南萬畢術』解析試論 (有馬卓也・東方宗教 130、2017.10、1-17、査読あり)

『淮南萬畢術』拾遺(3)(有馬卓也・東洋古典学研究 43、2017.5、51-66、査読なし)

『淮南萬畢術』拾遺(2)(有馬卓也・東洋古典学研究 42、2016.10、41-58、査読なし)

『淮南萬畢術』拾遺(1)(有馬卓也・東洋古典学研究 41、2016.5、115-132、査読なし)

『淮南萬畢術』研究序説(有馬卓也・東洋古典学研究 40、2015.10、1-19、査読なし)

『淮南萬畢術』訳注(7)(有馬卓也・東洋古典学研究 40、2015.10、79-99、査読なし)

『淮南萬畢術』訳注(6)(有馬卓也・東洋古典学研究 39、2015.5、105-127、査読なし)

〔学会発表〕(計2件)

中国古代呪術系医療の一端 「驚」の予防を中心に (有馬卓也・九州中国学会平成29年度大会、2017.5、於佐賀大学)

《淮南萬畢術》研究序説(有馬卓也・第十届漢代文學與思想暨創系60周年國際學術研討會、2016.11、於臺灣政治大学)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6．研究組織

(1)研究代表者

有馬 卓也 (ARIMA, Takuya)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10232068

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし